

三浦綾子論(十) — 『銃口』 —

* 小田島 本有

Motoari ODAJIMA

A study of Miura Ayako(10) — Juko(The muzzle) —

一

『銃口』執筆は小学館の眞杉章が「昭和を背景に神と人間を書いて欲しい」と依頼したことがきっかけである。かつて戦時中教壇に立ち、皇国思想を何の疑いもなく生徒に教えていた事実を敗戦後の墨塗りによって突きつけられ、自信を失った結果教職を辞したという体験をした綾子にとってみれば、「戦争」「昭和」の検証は自身にとって避けることのできないテーマであった。事実、彼女は既に『道ありき』(一九六九年)『石ころのうた』(一九七四年)などの自伝作品や小林多喜二の母親を語り手とした小説『母』(一九九二年)を発表し、それらの問題を取り上げていた。

三浦光世は『銃口』の成立事情について回想している(三浦光世『銃口』—綾子最後の小説、『綾子の小説と私 三浦綾子創作秘話』所収、主婦の友社、二〇〇一・一二)。眞杉は満州での生活体験があり、その半生が昭和そのものといっよく、それだけに綾子に期待するものが大きかったと言えよう。ちなみに執筆の依頼を受けた時点で綾子は北海道綴方教育連盟事件の存在を知らなかった。彼女にそれを教えてくれたのは旭川で古書店を経営していた目加田祐一であったと光世は述べている。目加田は綾子がかつて教壇に立っていた啓明小学校の出身であり、博学でそれまでもしばしば綾子にアドバイスをしていたという。ちなみに当初考えられていた作品名は『銃口』ではなく『黒い河の流れ』であった。主人公北森竜太が教師として赴任したのが幌志内という炭鉱町である(綾子が教師として初めて赴任したのが歌志内であった)。町を流れる川が石炭のため黒かつ

たことが作品の中では書かれているが、『黒い河の流れ』はたんにそれだけでなく、これが当時の戦争に向かいつつある暗い時代の流れを暗示した作品名であったことは想像に難くない。

綾子の取材の様子については佐竹直子の著作からうかがうことができる(佐竹直子『第六章 語り継ぐ』、『獄中メモは問う 作文教育が罪にされた時代』所収、道新選書、二〇一四・一二)。綾子は北海道綴方教育連盟事件で検挙され厳しい取り調べを受けた生き証人として小川文武、土橋明次らを取材した。三浦夫妻が取材に訪れたことで家族も事実を初めて知ったという。それだけ当人たちにとっては思い出したくない過去であった。その彼らを説得したのが綾子である。この本にはベンチで三浦夫妻に挟まれて取材を受けている土橋の写真が掲載されている。

ところで興味深い事実がある。

『銃口』の巻末には綾子が執筆にあたって参照した参考文献・資料が数多く掲載されているが、その中に平澤是曠『弾圧 北海道綴方教育連盟事件』(道新選書、一九九〇・一)がある。これは綴方教育連盟の誕生から事件、さらにはその後に至るまでを詳細に描いており貴重な文献となっている。

綴方教育連盟の呼びかけ人となったのが坂本亮であった。佐竹の著作でも取材のきっかけになったのはこの人である。たまたま佐竹が終戦特集として墨塗りの取材を釧路市内に住むかつての教員寺本美久に行った際、寺本が心の傷としてか

つて敬愛していた先生が急に姿を消した事実を打ち明けた。それが坂本亮であった。佐竹は故人となっていた坂本の自宅を訪れ、そこで獄中メモを発見する。その獄中メモとの出会いが佐竹の粘り強い仕事のきっかけとなったのであった。

釧路で教員をしていた坂本は、あるとき函館の小学生が書いた「ナット売り」という綴り方に目を奪われた。そしてこの小学生の担当であった小笠原文次郎（後の松田）という教師の指導力に感心し、全く面識のない小笠原に手紙を書いて綴り方の教育集団を作りたいと願いだしたのである。綾子が参考文献として挙げている平澤の本にはそのことが詳しく書かれていた（ちなみに佐竹が故坂本邸で発見した獄中メモは松田文次郎が書いたものであった）。

ところが後に綾子は小田切正との対談の中で、この「ナット売り」を知らなかったと述べている（佐藤将寛「第五章 『銃口』の舞台と生活綴方実践のモデルたち」「四 「ナット売り」と「ひとつの衝撃」、『三浦綾子最後の小説 『銃口』を読む―綴方事件とそのモデルたち―』所収、柏艚舎、二〇〇六・八）。

『銃口』の中で転校してまもない中原芳子がいざば遅刻し、それが早朝の納豆売りのためであったことを担任の坂部久哉先生が生徒たちの前で伝える場面がある。厳しい経済状況に置かれていた芳子がそうせざるを得なかったことを涙ながらに語り、生徒たちを納得させるその姿に接したとき、竜太は将来教師を目指すように心に決めた。いわば竜太の人生を方向づけた出来事であった。『銃口』を読んだ人にとっても忘れがたいこの場面を書いたとき、少なくとも綾子自身は平澤の著作で紹介されていた「ナット売り」という綴り方のことを全く素通りしてしまっただか、あるいはすっかり失念していた。

参考文献に載っていることを参照者がすべて把握しているということとはあり得ない。このケースは執筆という行為がまさに人間の作業であるという実に単純明快な事実を改めて我々に知らせているとも言えよう。

二

北森竜太が教育に携わるなかで綴り方に重きを置くようになった要因は遠く小学生時代にまで遡る。それが作品の冒頭に書かれた大正天皇崩御に伴う御大葬の際の綴り方授業での体験である。

当時竜太は級長であった。日頃担任の河地三造は「思ったこと、見たこと、聞

いたことを正直に書け」と言っていた。御大葬の日は雪が降っており、足袋が雪にぬれて足が冷たかった。竜太は御大葬の日を思うと、足の冷たさを思い出すことを書いたが、これが皇国教育の体現者である河地先生の怒りを買った。一方、竜太のいところであり副級長である真野楠夫は、「ぼくは、大正天皇陛下がお隠れになったと聞いた時、心臓のつぶれる思いがしました」と書き、河地先生に誉められる。そればかりでない。竜太は居残りを命じられ、作文を書き直すよう指示される。書き直しの際の竜太の心は釈然としないままだった。

要するに、楠夫のように、「天皇陛下が死んで悲しい」、と書けば先生は許してくれる。だが楠夫は、あの日学校に行くのに、悲しそうな顔など全くしていなかった。（昭和の歌・二）

「竜太は納得のいかぬままに、楠夫の綴り方を真似て書いた」。しかし、それは竜太の正直な思いを反映させたものではなかった。だが、これを見せたところ、河地先生は「うん、これでいい。楠夫よりよく書けているじゃないか。初めからこう書けば文句はなかったんだ」と言う。帰る際に不意にこみ上げてきた涙は口惜しさだった。結局この先生は綴り方に天皇崇拜の言葉が書かれているかどうかという実に単純な判断材料しか持つておらず、生徒の心を理解しようとはしていない。しかも、竜太は「思ったこと、見たこと、聞いたことを正直に書け」という河地先生の言葉に従っただけに、裏切られたという思いもひとしお強かった。竜太が味わった無念の思いは実に深いものだったのである。

彼が四年生となったとき、新しい担任となった坂部久哉先生にあれほど心を奪われたのは河地先生から受けた心の傷があまりにも深かったことの反映であったとも言える。ともすれば河地先生は生徒が自分の信奉する価値基準に従順であるかどうかという一面的な見方しかしなかったのに対し、坂部先生は生徒の人格を尊重し、彼ら一人一人を見つめた。彼がいざば遅刻してくる中原芳子の家庭の事情を把握していたのもその一例である。河地先生の教育方法が生徒を篩にかける側面を持つており、ともすれば教室内でいじめを生み出しかねない環境を醸成していたのに対し、坂部先生は決していじめは許さないという姿勢をはっきり打ち出していた。生徒たちの間で坂部先生は人気があった。ところで作品を読んでいると、河地先生がいざば坂部先生に対して生徒たちの前であるにもかかわ

らず批判的な発言をする場面が見られる。河地先生から見れば坂部先生は年下であった。生徒の人格を尊重し自由主義思想の体現者とも言える坂部先生と河地先生が相容れなかったのは事実だろう。だが、心の底にはかつて自分が担任した生徒たちがすっかり坂部先生になつていて姿を目の当たりにして、嫉妬の念も渦巻いていたのではないか。

ところで竜太には綴り方こそ教育の根本に据えられるべきものだという信念があった。なぜなら綴り方を通して生徒の素直な感情が表れるはずであり、教師はそれを大切にしなければならぬという思いがあったからである。ところが、あるとき生徒の一人左藤学が竜太にこう疑問を投げかけてくる。

「先生は、何でもかんでも心の中に思つてることを書けと言つたよね。でもね、ぼく、父さんの葉書を見ているから、先生のいうこと正しいのかなあつて、思つちやつて……」

(裏山・二)

学の父親は出征していた。父親が寄越す葉書は軍事郵便として検閲の判が押しである。いつも「元氣だ」とは書いてあるが、苦しいとかつらいなどは書けない。学の母親はそのことに物足りなさを感じてはいるが、息子には「言つていいことと、悪いことがある」と言い聞かせていた。言い方によっては長屋を追い出されることもあることを、この母親は日頃の生活の中で息子に諭していたのである。

竜太が「綴り方が×点をつけられない科目」と述べたことに学は感激した。しかし、その一方で軍事郵便には書けなくても、綴り方には書けるものがあるのか、という疑問を感じたりしていたのだ。竜太はこの少年が厳しい環境の中、真剣にものを考えている姿を目の当たりにし、自分の言葉を反省する機会を与えてくれた学に感謝の気持ちすら抱いている。これが北森竜太という教師だったのである。

三

竜太は綴り方教育に熱心であった。それだけにしばしば教頭から綴り方の時間を作業の時間に振り替えてほしいと言われることには合点がいかなかった。竜太には校長や教頭が綴り方に関心がなく軽視しているようにしか思われなかった。

その不満を同僚の沖島先生に伝えたところ、沖島先生も綴り方の授業を前年五、六回潰されたという。そして沖島先生は「いやいや、教頭の最も関心を持つている教科は、綴り方ですよ」と意外なことを言うのである。沖島先生によると、校長は元左翼だったが治安維持法が制定されてまもなく転向した。この学校が午前五時に出勤して清掃や修養をすることを教職員に課し、徹底した皇国教育を實踐していたのも、校長が転向後の愛国者たる自らの姿勢を殊更見せようと思つていたからに他ならない。沖島先生によると、一昨年、北海道綴方教育連盟ができた。これ自体は熱心な国語教育を実践しようとする集まりであり何の問題もないのだが、なかにはこれが治安維持法に触れるかもしれないと神経を尖らせる人間もいる。校長もその一人であるという。竜太は熱心な教員であったが日々の仕事に忙殺され新聞をまともに読むこともなかった。いわば社会の動きにも無関心な人間だった。その点で世の中の動きに懸念を示していた恩師坂部先生とは実に対照的である。

中原芳子もまた坂部先生の影響を受けて先生となった。そして竜太と気持ちを通わせ二人は婚約する。芳子の赴任した学校は竜太の勤務する学校とは対照的に校長が綴り方教育に熱心だった。そして芳子は校長から綴り方の研究授業をするよう言われた。その校長から札幌で綴方連盟の勉強会があることを紹介され、彼女は竜太も誘つたのである。ところが校長が伝えた時間は実際とは異なっており、二人が会場を訪れたとき勉強会は終わっていた。だがメンバーが残っていたため少し会話を交わすことができた。このとき出席者名簿への記名を求められ、竜太は自分の名だけを署名したのである。これが後に警察に引つ張られる要因となった。

佐竹によると、北海道綴方教育連盟事件は一九四〇年一月から翌年四月にかけて、八十名近くの教員が検挙され、逮捕者五十六名、そのうち十二名が起訴され、その後死亡した一名を除き十一名が有罪判決を受けた事件である。罪状は治安維持法違反ということであるが、彼らは共産主義者でも無産主義者でもない。しかも彼らの検挙は新聞にも載らず秘密裏に行われた。いわば警察の勇み足であり、佐竹が発見した獄中メモは警察が事件をでっち上げ、教員たちを無理やり共産主義者に仕立て上げようとした事実を生々しく伝えていた。『銃口』において

も北森竜太、そして彼の恩師でもある坂部久哉もその犠牲者となっている。竜太が突如警察に引つ張られたのは一九四一年一月九日。釈放されるのは同年

八月二一日のことである。その間の取り調べの様子は詳しく描かれているが、この辺は実際に取材した小川文武や土橋明次らの証言によるところが大きいと思われる。例えば、取り調べは連日行われるわけではない。しかも未明の時間帯に突然呼び出される。あるいは竜太の部屋にあったという『共産主義読本』（これはたまたまある先生が置いていただけであり、竜太は読んですらいなかった）を差し出され、これを読んで感ずるところがあったら傍線を引くよう指示される。竜太はこれに従ったわけだが、これが後に竜太が左翼の本を熟読していた証拠物件として扱われることになるのである（慟哭・一）。また、無理やり退職願を書くことを強いられ、竜太は悲嘆の涙にくれた。あれほど教職に誇りを持っていた竜太にとって教職を辞めることは生きがいを失うことに他ならなかった。

竜太は退職願を書かされた時点で、ようやくおぼろげに自分の立場がわかったように思った。竜太はあの瞬間まで、法というものを神聖で厳正なものとして信じていた。国民の生活を凶る警察の働きに、何の疑いも持ったことはなかった。だが、只素直にそう信じてきた竜太にも、どこかおかしいということがわかってきた。

（最敬礼・一）

一方の坂部先生も厳しい取り調べを受ける場面が描かれている。その中で坂部先生は妻が洗礼を受けていながら、自身がまだ洗礼を受けていないことを尋ねられ、信仰が定まらず不信仰であると答えた。それに対し特高主任は「不信仰？ そんな単純な理由じゃないだろう。北森竜太は、坂部先生は本当は共産党員なので、洗礼などは受けないと、係の刑事に言っていたようだね」と嘘をつく。「北森はそんな嘘をいう男ではありません」と否定すると、「両耳を引っ張られたり、頭を拳で殴られたりした（慟哭・一）。また、この坂部先生は逆さ吊りにされたことも語っていた。この辺に当時の強引な取り調べの方法がはっきりと伺える。

被疑者を共産主義者として強引に仕立て上げようとする姿勢は前掲の平澤の著作にも書かれている。老判事は子供の書いた「犬」という作品において、「犬殺し（野犬捕獲員）に殺された犬をかはいそうに思っているところを書いているのは、弱者への同情心を養うためで、それがやがて階級闘争になる」という、傍目には滑稽とも思えるこじつけをしていた（第四章 綴り方教育連盟事件）

「4 取り調べ（二）」。

竜太と坂部先生は獄中で一度だけ十分間の面会を許される場面がある。そのときの坂部先生は髪が伸び、無精髭に覆われた顔は青白かった。ときどき咳もしていたが、「竜太、苦しくて人間として生きるんだぞ。人間としての良心を失わずに生きるんだぞ」と竜太を励ます（最敬礼・一）。そしてこれが坂部先生との最後の対面となった。坂部先生は体調を崩して釈放されたものの、一か月余りで亡くなったのである。竜太は釈放後、恩師の死を知ったのだった。

竜太はこう芳子に問いかけている。

「運命っていったい何なのだろう？ 神っていったい何なの？ 芳子さん、教えてくれないか。坂部先生のお葬式は、親戚と隣近所の人たちと、教会の人が少しと、それでも三十人は集まったかなって聞いたけど、ぼくは、あんなにすばらしい先生が、そんな淋しい葬式を、と思うと、神はいるのかって、誰彼なしに問いたくなる。芳子さん、君は教会へ行ってるんだらう。神さまを信じているんだらう？ 神さまっていったい、何なんだ。助けてくれるもんじやないのかい？ かばってくれるもんじやないのかい？ 一生懸命生きた人間の、味方になってくれるもんじやないのかい？」

（晩夏・三）

クリスチャンである芳子は「神は、絶対者」とし、「その絶対者なる神の深さはわたしたち人間の想像を超えているわ。人間の物指では計ろうとしても図ることができない」と語るが、この言葉を竜太が素直に受け入れられるはずがなかった。

同じ問いかけは既に『泥流地帯』『続泥流地帯』の中でも見られた。日頃貧しい中でも真面目に生きていた家族たちを泥流で失ったとき、耕作はその疑問を投げかけていたのである。竜太や耕作の場合、真面目に生きている人間が報われる世の中であってほしいという願望がある。したがって、真面目な生き方をしてきた人間が理不尽な死に方をしたとき、「神は助けてくれないのか」という恨みになるのだ。しかし、そう考える限り、神に対する疑念を拭い去ることはできない。

だが、このような疑念と向き合うことこそが信仰の第一歩であることも事実なのだ。亡くなった坂部先生も教会に通ってはいしたが、「信仰が定まらず不信仰である」と取り調べの中で答えていた。ここでいう「不信仰」とは「何も信じようとしなない」の意味ではない。「信じたい」という気持ちがありながら、その一方

で疑念を拭い切ることもできず、その両者の間で揺らいでいたのが坂部先生のいう「不信仰」だったのである。妻が洗礼を受けているからという単純な理由で洗礼を受けることをせず、あくまでも誠実に神と向き合おうとした。そこに坂部先生の信仰に対する真面目な生き方があったのだ。

四

竜太は釈放されたものの、新たな仕事に就こうとしてもそこには必ず特高がつきまとい、結局仕事を安心して続けられる状況ではなかった。その中で無力感に苛まれてもいたが、あるとき芳子から満州で教師をしてみないかと声をかけられ、竜太は一筋の光を見出す。だがそれも一瞬の夢に終わった。竜太に召集令状が来たからである。

『銃口』下巻の最大のクライマックスは、敗戦を迎え、山田曹長と竜太が満州で抗日義勇団に捕らえられる場面である。

なぜこの二人だけの行動になったのか。山田曹長が銃を捨てて丸腰になるという判断を下したからである。銃を捨てるということは〈脱走兵〉の汚名を被ることになる。だが、銃を持たない方が逆助かるのではないか、という判断が山田にはあった。だが、この考えはほかの兵士には理解されない。結局彼に従ったのは竜太一人だったのである。

敗戦を迎える前から山田の人命尊重の考え方は一貫していた。彼はかねがね「おれは捕虜になることをそれほど恥ずかしいことだと思わない」と言っていた。彼はむしろ「人間として自分に不誠実なこと、人に不誠実なこと、自分を裏切ること、人を裏切ること、特に自分を何か偉い者のように思うこと」を「恥ずかしいこと」として挙げていたのである。

また、「おれが生まれるためには、父と母の二人が必要だ。その父母が生まれるためにもそれぞれの父母が必要だ」とし、「それを思うと、おれは自分一人の命などは、おこがましくって言えない気がするんだ」と述べていた。さらに彼はこうも述べている。

「な、北森上等兵、命って厳肅なものだろ？ 様々な人生があつて、様々な汗や涙があつて、ようやくわれわれがいるというのに、自分一人の命を軽んじ

て自決などしたらどうなるか。今後何万年もつづくであろうたくさんの人々の人生を奪うことになる。生まれたいと熱望している君の子孫の願いを断ち切ることになる。一人の死は、何千何万人の死となるかも知れないのだ」

(命・一)

ここに山田の考え方が凝縮されている。無駄な殺生は避けるべきというのが彼の考え方の根底にはあり、それは「生きて虜囚の辱めを受けず」という「戦陣訓」の考え方も相容れないものだった。事実彼は竜太に「自決するな」とも言っている。これは獄中で「どんな時にも絶望しちやいけぬ」（最敬礼・一）と力強く語っていた坂部先生とも通底し合うものがある。作品の中でも敗戦を迎え集団自決をした人々の死体を竜太が目にする場面が描かれているが、これは実際にいくらかでも見られた事実であり、それだけに山田曹長の言葉は一層際立ってくる。

そもそも銃を捨てて丸腰になるということは、敵を信頼する強さがなければいけない。疑心暗鬼では到底不可能なのである。おそらく綾子はこの作品を執筆しながら、平和な世の中を築くにはこのような信頼関係がなければいけないという思いがあったのだろう。

山田と竜太は朝鮮人が組織する抗日義勇団に捕らえられ、隊長の前に引き出される。そこで竜太は懐かしい金俊明との再会をした。金はメンバーの信頼を得た抗日義勇団の隊長だったのである。

金と竜太との出会いは竜太が中学三年の頃に遡る。金は当時いわゆるタコ部屋で厳しい労働を強いられていた。タコ部屋から労働者が逃げ出し、それが見つかるととんでもない拷問に合うと言われていた。その危険を冒して逃げ出したのが金であり、その彼をかくまっていたのが竜太の父政太郎だったのである。綾子は『銃口』の二年前に『母』を発表しているが、その中でも多喜二の両親がタコ部屋から逃げてきた労働者を咄嗟の判断で救う場面を描いてもいた。

関東大震災が起ったとき、朝鮮人を危険視する噂やデマが飛び交い、その結果多くの朝鮮人が犠牲となった事実はよく知られている。逃げてきた金は見つかったとき、「助けてください、旦那さん」と懇願した。そのとき、政太郎は「目が澄んでいる」として金を信頼し、保護した。このとき政太郎が作業衣を金に渡すよう伝えたが、言われた人間は金にそれを投げた。そのことを政太郎が咎めるとその男は「でも、こいつは朝鮮人で……」と答えている。それに対し、政太郎は

「馬鹿をいうんじゃない。たとい朝鮮人でも同じ人間だ」と言い放った(縁(一))。この「同じ人間だ」という言葉は長らく竜太の心に残ったが、おそらく金の心にも響いたはずである。結局、金は竜太の家で二週間ばかり保護され、その後政太郎の計らいで帰国することができた。このようにして金にとつて北森一家は日本で忘れられない恩人となったのである。

金は部下たちを集め、山田と竜太、二人の助命を乞うた。部下たちは抗日義勇団のメンバーである。隊長の突然の申し出に戸惑ったのは言うまでもない。金の申し出に当初賛成の意を示した者は五、六名。大半は納得できず、彼らは日本のそれまでの非道ぶりを訴えた。金は部下たちの言葉に耳を傾け、その気持ちに対しては十分理解を示しながらもこう語る。

「寝る時起きる時、わたしは北森一家の無事を祈らぬことはなかった。君たちは、自分の命を助けた家族をも、殺す隊長であつて欲しいとねがうのか。(略) わたしが思うに、もし北森一家のような人が、日本にもっといたなら、朝鮮と日本の国民は兄弟のように愛し合うことができたとと思う。日本人のすべてが極悪非道なのではない。わたしは、北森家のような心温かい家庭を、日本の中に、一軒でも増やしていきたいと思う。わたしは北森家から受けた好意を思うと、涙がこぼれる。ただの一度も、北森家の人から見下すような態度をされたことはない。中学生であつたこの竜太君も、あたたかい目で、わたしを見守ってくれた」

隊員たちの目の光が変わった。
「自分の命の恩人を処刑するような隊長が、君たちは本当に欲しいのか。それとも、命にかけても助けようとする隊長を欲しいのか」 (邂逅・一)

そして金は部下たちの前で土下座し、「諸君、この北森竜太君と山田曹長を、どうか助けてやって欲しい。もしそれが許されなければ、わたしは代つて撃たれてもよい！」と言つた。この命がけの行動に部下たちは心を動かされ、金の提案を受け入れるのである。

三浦文学を愛読する人は多いが、その一方で三浦文学に対して批判的な人々も存在する。それらの人々が挙げる理由の一つが、物語の展開がしばしば偶然性に依拠している点である。右に挙げた場面は確かにそう言われても致し方のない

面はある。竜太は偶然の幸運で命拾いをしたと。その点だけを捉えるならば、指摘は確かに当たっている。だが、重要なのはその先である。おそらく綾子はそう指摘される可能性のあることは百も承知だった。それでも彼女には是非とも書かねばならぬものがあつたのである。

金俊明の発言は、命の恩人に対する恩返しという次元では括れないものになっている。隊員の発言によると、金の従妹は日本軍の手によって慰安所に連行されたという。隊員たちの中には身内に同様の体験をした人も決して少なくなつた。だからこそ彼らは日頃日本の非道を憎み糾弾しようとしていたのである。その中心にはもちろん金がいた。だが、この時点で金が憎むべき「日本人」の中に北森一家は含まれていなかった。

ところが隊員たちが捕まえて金の前に連れ出されたのが北森竜太であつた。このとき金は竜太もまた紛れもない日本人であるという当たり前の事実を直面させられた。金の目の前に現れた日本人が彼と何の面識もない人間であつたならば、その日本人の命はおそらく失われていただろう。そして金自身もそのことに何ら疑いを抱くことすらなかつたのではないか。だが、目の前に現れた日本人が金の命の恩人であつたという事実が、金にそれまで当然としていた考え方に変更を迫つたのである。

今までのやり方に従うのであれば、竜太と山田曹長は命を奪われることになる。そのことは命の恩人を「憎むべき日本人であるから」という理由で抹殺することに他ならない。それは本当に正しいことであるのか。金はそういう根本的な疑問にぶつかった。ここで命の恩人の命を奪うということは自分たちの根本的な人間的欠落を露呈することになるのではないか。憎むことばかりでは何も将来の光は見出せない。日本の中には北森家のように金の心を慰め、支えてくれた人々が確かにいる。そういう人たちを大切にしないで、自分たちの活動にはいかなる意味があるのだろうか。「わたしは思うに、もし北森一家のような人が、日本にもっといたなら、朝鮮と日本の国民は兄弟のように愛し合うことができたとと思う」という金の発言は、個人的な意味での恩返しという次元を越えて未来を見据え、朝鮮と日本のよりよい関係を夢見るもので、まずは個人からそれを実践しなければならぬ、と気づいたゆえのものであつた。金の言葉は作者の声でもある。戦争中に教師として苦い経験をした綾子だからこそ、これは是非とも書かれなければならないのであつたのである。金の言葉は竜太や山田のみならず、隊員たちの心を捉えた。

そしてそれが読者の心にも届いてほしいという切なる作者三浦綾子の願いが込められていたのである。

五

戦地で竜太が出会った重要人物としてもう一人、近堂一等兵を挙げなくてはならない。竜太の指導担当であった近堂は出会った当初から竜太を笑顔で迎えたばかりでなく、竜太の実力を知った彼は竜太になるべく勉強させる時間を与えたり、竜太がなるべく下士官の目に触れるような便宜を図ったりした。事実それが功を奏し、竜太はやがて自分の理解者となってくれる正本中隊長と出会うこともできた。他人の手柄をあたかも自分の手柄のように見せかけることが珍しくない軍隊において、近堂のように全く私心のない存在は極めて稀であった。

後に近堂自身が竜太に語っているように、家が貧乏だったため、近堂は周囲からもいじめられ非常に寂しい幼年時代を送った。「どうかして、ただの一人でも友達になってくれないものかと、思ったことがある」と近堂自身述べている。そして一等兵となり彼にも一人の輩下が戦友として与えられることになった。

「それを聞いた時、どんなにうれしかったことか。北森一等兵、その時の俺の気持がわかるか。俺は生まれてはじめて、人の上に立つという経験をするわけだ。絶対に俺は下の者に威張ったり、殴ったりはしまい。喜ぶようなことばかりしてやりたい。そう思って待っていたのが、北森一等兵、君だった。長年、人夫頭以外心をゆるせる人間がいなかった俺に戦友ができた。うれしかったなあ。毎日毎日俺と口を利いてくれる人間がいた。うれしかったなあ」（鑑戸）

竜太が師範学校の出身で万事に秀でていることを知った近堂は、「北森のほうが俺の先生だな。一日にひとつでいい。漢字を教えてくれんか」とまで申し出ている。あくまでも謙虚でかつ親切だった。

この作品の中では矢須崎兵長というのが出てくる。兵士たちを周囲に集め、それまで自分が行った残忍な殺害を手柄話のように話すことが習慣化していた。そのことに耐えられなくなった竜太が異議を唱える場面が描かれるが、腹を立てた矢須崎は竜太をさんざん殴りつける。このため竜太は片方の耳が聴こえなくなっ

たほどである。この矢須崎のような人物を一方に置けば、近堂の態度は殊更読者に鮮明な印象を与える。

近堂にはかつていじめられ、孤独な日々を送ったという過去があった。中には同様の体験をしたことで周囲を恨み、その仕返しをする人もいるだろう。しかし近堂の場合はそうではなかった。近堂が新しく配属される輩下の戦友を心待ちにしていたのは前掲の彼の言葉からも伺える。だがそればかりではない。出会った相手が竜太であったということが、近堂をより親切にさせたという側面があったのも事実なのである。

竜太はあらゆるところでその才能の片鱗を見せ、近堂を感心させている。後に竜太が師範学校の出身であることを知って近堂は合点がいった。年齢でいうと竜太の方が近堂よりも四、五年上である。ところが竜太はそのことで近堂を軽んじることがない。あくまでも近堂を立てようとする。才能豊かな竜太が上官の目に留まるよう近堂はいろいろ手を尽くすが、竜太が上官から高い評価を得られる姿を目の当たりにすることは近堂にとっても嬉しいことだったのだ。近堂にとっても竜太との出会いそのものが人生における大きな事件だった。

この近堂の最期もいかにも彼らしい。近堂が終戦の八月十五日にソ連戦闘機の銃撃によって死亡したのを竜太が知るのには、古浜武という人物からの手紙によってだった。古浜の手紙によると、古浜と近堂はトラックに軍の物資を満載して移動中攻撃を受けた。このときハンドルを握っていた近堂が「古浜っ！ 敵機だ。伏せろ！」と古浜の上に覆いかぶさり犠牲となったのである。もし近堂が動くことがなければ、二人の立場は逆になっていたろう、と古浜は述べていた。

ところで、古浜が竜太のもとに手紙を寄越したのはそれが近堂の遺志によるものであったことを竜太は知る。少し長くなるが古浜の手紙を引用する。

日頃から、万一自分が死んだ時は、旭川の北森竜太君に知らせて欲しいと言われておりました。住所を書いた紙も、私の手帳の中に折り畳んでしまっておきました。とりあえず近堂上等兵の最期をお知らせいたします。何卒お元気で
お過ごしのほど、お祈りいたします。

尚、近堂上等兵は、いつも北森上等兵と戦友になれたことを「一生の宝だ」と喜んでおられました。そして、無事に日本に帰る日が来たら、必ずお訪ねしたいと楽しみにしておられました。そしてまた、戦争が終わったら夜間中学に

通つて、一生懸命に勉強するのだとも、言つておられたのであります。まことに申し訳ありません。この近堂上等兵が死んで、自分のような者が生きて帰りました。何卒お許しください。(明暗・二)

この文面から伺えるのは、近堂が竜太との出会いを「一生の宝」として捉えており、竜太との思い出をしばしば古浜に語っていたという事実である。そして彼は戦争が終われば夜間中学に通つて一生懸命勉強したいと生前述べていた。おそらくそれは竜太との出会いによつて一層強まった願望であつたろう。自分が死んだ際には竜太に知らせて欲しいと住所まで古浜に教えていたという事実、改めて近堂にとつて竜太がいかに掛け替えのない存在であつたかを伺わせる。

一方の竜太にとつても近堂との出会いは「一生の宝」であつた。このように非常に強い絆で二人は結ばれていた。それだけに近堂の死を知つた時の竜太の驚きは想像に難くない。

古浜からの手紙が竜太のもとに届いたのは十二月のことだつた。戦争が終わつて四か月が経過していたが、その頃の竜太は無力感に苛まれ、周囲も心配するほどだつた。そこに近堂の死を知らせる手紙である。事実母のキクエは竜太がなおさら落胆するのではないかと案じたほどだつた。

だが、近堂の死は竜太を立ち直させる力を持つたのである。「もうどうでもいようなむなししい気持ちになつたりもした。でも、今日近堂上等兵の最期を知つて、何かが自分の中で始まるのを感じた。甘つたれちやいけない。立ち上がれ、という声を聴いたような思いになつた。ぼく、やはり教壇に帰ることにする。教壇に立つて、近堂上等兵のように生きた人間のことを、生徒たちに教えてやりたいんだ」と、竜太は新たな決意を家族の前で語るのである。

六

竜太は再び教壇に返り咲いた。しかも赴任したのは彼の母校大栄小学校だつた。彼は生徒の前に立つが、それまでの記憶が蘇りなかなか言葉が出てこない。その場面を引用する。

口を開かぬ竜太に、生徒たちは次第に声をひそめた。心配げに、一人の生徒

が言つた。

「先生、病氣かい」

心配をあらわにした声だつた。竜太は頭を大きく横にふつた。そして叫んだ。「すまん！ 先生はな、先生はな、この教壇に立ちたかつた。どんなに立ちたかつたことか、どんなに立ちたかつたことか……」

教卓の上に涙がぼとぼと落ちた。生徒たちは顔を見合わせた。

「先生はうれしくて、口がきけないんだ。どうしてこんなにうれしいのか、体中がふるえるほどだ。君たちも六年生だ。先生の話、ひとつ聞いてやつてはくれまいか」

生徒たちの二、三人が言つた。

「いいよ、聞いても」

その声に救われたように、竜太は「廻り道」と題して話し始めた。竜太の教師としての再出発第一日はこうして始まつた。(明暗・四)

文章はこのあと、急に四十三年後の一九八九年二月二十四日、昭和天皇大葬の日に飛ぶ。竜太・芳子夫妻は東京在住の教え子たち数人の招待で上京したのである。これは一年前からの約束だつた。

この懐かしい再会の中で、教え子たちは竜太が話した「廻り道」のことを今でもよく覚えていて誰かが語っている。「先生がいきなり、ぼくは警察の留置場にぶちこまれていたんだ、と話し出したのには、びっくりしたなあ」「『廻り道』という題で、真剣に話してくれた」という言葉からも、この時の竜太の話が生徒たちの心にしっかりと刻印されたことが伺える。宮園美佳は齋藤孝が『教師Ⅱ』身体という技術構え・感知力・技化(世織書房、一九九七・一一)の中で、子どもの身体の在り方と自らの身体性を同調させる教師の身体性を「積極的受動性」として捉えたことに注目している。それを踏まえ、宮園は『銃口』における坂部先生や竜太、あるいは皇国教育の在り方に対して自らのスタンスを守つた木下先生を「柔らかな身体」の持ち主、一方で河地先生や最初の赴任校の沢本校長を「硬い身体」の持ち主、というように腑分けをしていた(三浦綾子『銃口』における教師像―「柔らかな身体」が結び合わせる戦前・戦後―、『常磐会学園大学研究紀要』第十四号、二〇一四・三)。宮園によると、竜太の「積極的受動性」は彼が敬愛する坂部先生から受け継いだものであり、事実竜太は教壇に立つた際に「自

分も坂部先生の真似をしようと思った」と書かれていることを指摘している。これはなかなか鋭い指摘と言えよう。

宮菌もまた竜太が再び教壇に立った場面に注目している。竜太は声を出すことができないが、その姿が子どもたちにさらされることで彼らは先生に何か「大変なこと」が起こったことを理解している。宮菌は、このとき竜太は「見る／見られる教師」としての身体を媒体として生徒たちに伝えることが可能になったとした。おそらく「見る／見られる教師」としての身体性はこの時に誕生したのではなく、竜太が初めて教壇に立った時点から持ち合わせていたものではないか。そもそも教師という職業がそういうものなのである。ただ、竜太が復職した際に新たに発見したのは、たとえ言葉を発することができなくてもそこには何らかのメッセージがあり、そのことは生徒たちにも伝わるということだった。生徒の一人が竜太の病気を心配しているし、竜太は口がきけない理由を話したうえで「先生の話、ひとつ聞いてやってはくれまいか」と生徒たちに語りかけている。「先生の話聞いてほしい」とは言わず、彼は「聞いてやってはくれまいか」と謙讓的な表現で生徒たちにお願した。この時点で、竜太の心にはある種のためらいもあったのだろう。それに対して生徒たちは「いいよ、聞いても」と、受け入れる姿勢を示したのである。ここに初対面でありながら、竜太と生徒たちの間で確固とした絆が生まれたのだった。

作品の中では、竜太が「廻り道」というタイトルで具体的に何を語ったかは明らかにされていない。ただ、我々読者は想像することが可能だ。竜太は自分が留置場にぶちこまれたことから語り始め、その後の辛かった過去を語っただろう。その中には退職願を書かされたこと、坂部先生の死を知ったこともあったはずだ。だが、そればかりでない。彼が再び教師に復職しようと思ったのは近堂一等兵の生きざまを生徒たちに伝えたいと思ったからである。復職するまでのプロセスは確かに「廻り道」であった。だが、竜太はこの「廻り道」を体験したからこそ今改めて教壇に立てることの幸せを痛感している。彼の言葉はその思いを表白するものだったに違いない。生徒たちにとつてみれば、竜太との最初の出会いがこのような形になったのである。「あの時の先生の言葉が、子供なりに不思議によくわかって、今までの人生にずいぶんと力になりました」という言葉が生まれる所以である。

周知のように綾子は敗戦を迎えたときに、墨塗りという現実を突きつけられて

自らの教師としての自信を失い、翌年春には辞職した。そして二度と教職に戻ることはなかったのである。いまや作家となった綾子にとって、『銃口』の最後で竜太を再び教壇に立たせたのは、それができなかった綾子の執筆を通しての代償行為でもあったのだ。

七

『銃口』の最後は竜太・芳子夫妻のこのような会話で終わっている。

「昭和もとうとう終わったわね」

「うーん、そういうことだね。だけど、本当に終わったと言えるのかなあ。いろんなことが尾を引いているようにねえ……」

竜太が答えた時、不意に強い風が吹きつけてきた。二人は思わず風に背を向けて立ちどまった。
(明暗・四)

昭和が終わってからの記述は極めて短く、作品が唐突に終わってしまったという印象は拭い難い。その中であって、「本当に終わったと言えるのかなあ」という竜太の言葉は、その直後二人に「不意に強い風」が吹きつけてきたことも思い合わせるに極めて示唆的である。

この作品のタイトルは『銃口』であるが、綾子自身、「あなたにも私にも銃口が向けられる」と語っていた。ここでの銃口は必ずしも目に見えるものばかりではない。しかも敵味方も分からない状況を踏まえて綾子は発言していた。

作中で銃口が出てくる場面は二つある。
一つは山田曹長が見た夢である。

「なあ、北森。おれはたつた今夢を見た。正夢か逆夢か知らないが、軍服姿のおれが、銃を持って、もう一人のおれに銃を向けた。銃口がおれのすぐ目の前にあった。あ、殺られる！　と思ったとき、その銃は小さな骨箱になった。謎めいた夢だと思わないか」
(逃避行・三)

八月十五日、竜太と共に行動していたときの山田の言葉である。不吉な夢であ

ることは間違いない。

もう一つは、その直後、この二人が抗日義勇団に捕まった時の記述である。

「しまった！ 感づかれたかな」

一隊がばらばらと、土塀の裏口から、竜太たちのいる斜面へと駆け上がった。驚くべき速さだった。思わず立ち上がった竜太と山田曹長に、ぴたりと銃口が向けられた。

(同)

この二つの引用文で出てくる銃口はいずれも実際のものであり、場合によっては人を威嚇し、殺傷も可能な武器である。二人が捕らえられた時が象徴的だが、銃口はいつ向けられるか分からない。

だが、綾子が「あなたにも私にも銃口が向けられる」という時、それは比喩的な意味合いを帯びてくる。綾子はいわば人間の自由や尊厳を奪うものとして、「銃口」を捉えようとしているのだ。竜太があるとき突然検挙され厳しい拷問に合ったように、いつ自分たちがどん底に突き落とされるか分からない時代が確かに存在したのである。しかも竜太は、そのような時代の変化というものにもあまりにも無頓着だった。竜太は当時の時代を生きたごく平均的な人間の一人だった。綾子はそのような人物を描くことで、時代の流れに対して絶えずアンテナを張ることの重要性を読者に伝えようとしたのである。それは現代を生きる我々読者に対するメッセージでもあるのだ。

『銃口』の刊行は一九九四年である。綾子が七十七年の生涯を終えたのはその五年後のことであった。